1969.7.17 明治大学新聞

図式的イデオロギー

大学は対策本部を中心に

続・焦点を探る

ストの背景と展望

前回の〝続・焦点を探る〟は学生側の動向を中心に追ってみたが、今回のその②は大学当局の経緯と展望をその主軸にルポした。次回はさらに大学のこの間の経過を予定している。（特別取材班）

（2）

今回のバリ・ストは「入口がなく出口ない」紛争といわれている。昭和四十一年度の学費紛争が精巧に組み立てられたスケジュール闘争とすれば、今般はハプニングの連続であるテーゼなき闘争といえよう。これは学生側にも大学側にもいえることである。しかも、闘争目標が〝大学立法〟というある面では全くとらえどころのない、だが〝反対〟ということでは双方とも利害が一致しているという矛盾上に成り立っている。それは「オーダー（秩序）かジャスティス（正義）か」――選択の相違でもある。当局はセオドナ・ルーズヴェルトの側に、学生はメリアムの側にそれぞれ立って、バリケードを境に対峙しているのだ。

さらに、幸か不幸か、リーダーなき闘争でもある。すぐれたアジテーターもいない。全共闘も代表者会議で、大学側も対策本部（三六人構成）方式でそれぞれ会議制で方針を決めていく。一面民主的であるが裏を返せば責任の不在ということになる。しかも、学生の方は運動方針や展望などセクト間でいざこざは絶えず、加えてアンチ・セクト（ノンセクト・ラジカル）の台頭で、全共闘の実体ははなはだ頼りないものがある。しかし、これをささえる底辺の層は厚く、大学問題を真剣に自分達の問題として深く認識し、闘争に参加している学生も多い。従って、前号で述べたように学生側にとっては組織化につぐ組織化、思索につぐ思索、そして行動が今後の課題である。すでに一般学生＝ノンポリ（の存在）のイメージは考えること自体ナンセンスであり、この層に期待をかけるという神話は文字通りすでに〝神話〟と化している。

ところで今回は大学側のこれまでの動きを追ってみよう。

かねてから全国で一〇〇校以上の大学で紛争が起こっていることなどから、本学の封鎖も時間の問題として教職員の関心は〝いつスト入りするか〟にあった。教員はこれまで例のなかった大学院封鎖のうわさに東大・日大の例から研究室が荒され、書籍その他が紛失・売り払われることを恐れて、中には夜半トラックを乗りつけてこれを運んだ教授もあったほどである。また、法人諸課や学部事務室など封鎖時にはすでに全て整理され運び出されている有様である。

いずれも、学生により提起された既成の秩序・権威への異議申し立てを認識せず、単に方法論的・表皮的にこれらを見て批判しようとしかしていないところに、現代の大学の抱えた悲劇があり学生のハネアガリを促す要因となっている。その意味では学生の提起した問題をインディックスしたところに解決の糸口があると思われる。

当局は十四日に二丁目が五号館封鎖に入る一週間沼前、すでに敷金一二〇〇万円家賃三〇万円の天下堂ビル五・六階（前は中大本部に使用）を借り、スト入りに用意していた。二十一日（土）に全学ストに突入後、二十三日（月）には　ちに天下堂ビルに総合事務局（小堀　久局長＝企画室長を設置するなど、この間の一連の行動は、これまでの教訓を生かし万事スムーズに事が運んでいる。

二十三日以降の経過は次回にゆずるが、前回の学費紛争と違い、今回の大学側の方針の決定は、法人理事会ではなく、大学の教学スタッフが中心となって運営しているところに大きな相違がある。ということは、大学に緩衝帯（結局、学費紛争時に教授会はその役割りは果せなかったが）存在しないということである。学生対法人・教職員とはっきり一線が引かれている。

大学の方針は連合教授会（春日井薫総長＝学部・短大の専任助教授以上）、学長を頂点とする対策本部が設置され、そのメンバーには、中川富弥（学長）、春日井薫（総長）、水野東太郎（法人理事長）、田中豊喜（教務理事）、木下半治（学務理事）、加藤五六（総務理事）、松本留義（財務理事）、石田四郎（理事）、麻生平八郎（大学院長）、和田英夫（法学部長）、小牧正道（商学部長）、白石四郎（政経学部長）、斎藤正直（文学部長）、高木亀一（工学部長）、岩本浩明（農学部長）、今村成男（経営学部長）、立石芳枝（短大学長）、岩下篤広（図書館長）、平野保（一部教務部長）、西垣脩（二部教務部長）、松田孝（学生部長）、浅田毅尚（副学生部長）大塚初貞（同）、稲垣勝（同）、土屋哲（同）、江島祐二（和泉地区委員長）、栗田健（学長室専門委員）、保住昭一（同）、水越潔（同）、中村重三（総務課長）、小堀炤久（総合事務局長）、永野徳光（広報課長）田川保男（教務課長）、天野孔（学生課長）、平田興次（和泉事務長）、小宮久（生田事務長）の各氏である。

しかし、このように人数が多いこともあり、一部には〝船頭多く船、山に登る〟と陰口をたたかれている有様である。だが、それは表面的なものにすぎず、真の方針は、〈図式的イデオロギー〉を武器に、ある意図をもって大学を変革しようとする集団が握っているといわれており、しかも民青＝体育会＝校友会の図式があるつながりをもっているととりざたされるにおよんでは、うなずかれるものがある。

さらに、今回の紛争の混乱の原因の一つに〝学生部不在〟ということがあげられる。これまで学生部は機能を全く果しておらず、有名無実の存在としてしかないところに悲劇がある。

なお、次回はこの事情と大学改革準備会（代表木村健文学部教授＝予定）を中心にのべてみよう。

味のアヴェニュー

コーヒー

大学移転先

総務課人事（明中TEL293－九六四八）、会計課（住友ビル・292－三三一一内272）、健康保険（明高応接室・293－九六三七）、図書館（閲覧事務室・293－五八二九）、管財課（明高5F・293－九八四五～六）、就職課（福山ビル・294－八六〇一～三）、一・二部学生課（昇竜館・294－〇五六六）、本館受付・校友課（小川町校舎ロビー・293－九八一三）、教職員組合（伊奈2階TEL246－〇九〇五）、和泉事務室（研修館・322－三一六二）、生田事務室（川崎市登戸一八四二明大仮事務所・044－91－六三五〇）、本部（天下堂ビル・293－九八四一～四各学部事務室、総務（庶務・文書）広報・企画室は近く移転。